

陳舜臣さんを語る会通信

NO.128 Nov. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel. 078-911-1671
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2024年11月15日

陳舜臣年譜(人と作品)

陳舜臣さんの年譜は、本通信で何度か、その時の趣旨に合わせて作成してきましたが、今回は、「経歴を詳しく、作品を簡潔に」を念頭において、作り直してみました。
(編集委員 橘雄三)

西暦	推理小説	小説一般	随筆・評論・歴史	通信No.
1919	台北西村商店に勤務する父・陳通(1896-1971)、神戸本店に転勤。1933年、友人と泰安公司を創業			
1924	2月18日、元町通7丁目で生まれる(七男三女の次男)			
	11月28日、孫文、神戸で「大アジア主義」講演			11、本号
	「小学校にあがる前に、私は二度か三度台湾に帰省したようである」			
1932	小学3年になる前の春休み、祖父の法事で台湾へ帰る			
1937	7月 盧溝橋事件 中学(神戸市立第一神港商業学校)2年の夏休み、父をのぞく一家で台湾の新莊へほぼ一か月の帰省			
1938	7月 神戸大水害			
1941	4月 大阪外国語学校印度語部入学 12月 アジア太平洋戦争始まる			
1944	秋、東京神田の古本屋で『西行漫記』(「Red star over China」の中国語訳)を買う。興奮を覚え幾晩も睡れず			114
1945	3月17日 神戸空襲。『三色の家』のモデルとなった海岸通の家、焼失			
	8月15日 第二次世界大戦終結			
	敗戦で、日本国籍から中華民国籍となったことにより、母校で教職に就くという道が閉ざされる			
1946	2月末、帰国船に乗る。台北県立新莊初級中学の英語教師を務める(～49.10)			
1947	二・二八事件起きる(台湾) ■民衆による反国民党暴動を台湾省行政長官兼警備総司令陳儀が武力弾圧			
1949	10月 中華人民共和国建国 10月 日本に戻る ■この頃になるとみすばらしい敗残兵の大群が台湾へ			
	12月 国民党政府、台北に遷る			
1950～	1950年3月 結婚。日中の民間貿易が再開され、忙しかった家業を助けるようになる			
1960	53年 妹・妙玲さん、祖国建設の情熱に燃え、二十歳になったばかりの若さで家族と離れ、第一回華僑帰国船興安丸で大陸へ			
	57年頃から小説を書き始め、59年頃には、作家を職業とする決意が固まる			
	60年「風のなか」が第十一回文学界新人賞の最終審査候補作になる			
1961	枯草の根＊ 江戸川乱歩賞 作家デビュー			43
1962	三色の家＊			51
	弓の部屋＊			68
	★方壺園			53、88、14
	怒りの菩薩＊			3
	割れる＊			52
1963	天の上の天			77
1964	月をのせた海＊			57
	黒いヒマラヤ＊			77
	まだ終わらない＊			78
	白い泥＊			78
1965	★桃源遥かなり			74、17
	神戸というまち			69
1966	炎に絵を			54
	影は崩れた＊			79
1967	阿片戦争＊			20
1968	濁った航跡＊			79
	★紅蓮亭の狂女			74
1969	玉嶺ふたたび＊ 日本推理作家協会賞			41
	孔雀の道 日本推理作家協会賞			41
	青玉獅子香炉 直木賞			19、88
	★幻の百花双瞳			75
	他人の鍵			68
	★銘のない墓標			81

上の表、黒字は陳舜臣さんの経歴で、水色字は世界、中国(大陸、台湾)の出来事です。作品は単行本刊行年順に並べています。作品題名、緑字は推理小説。茶字は小説一般、紫字は随筆・評論・歴史などで

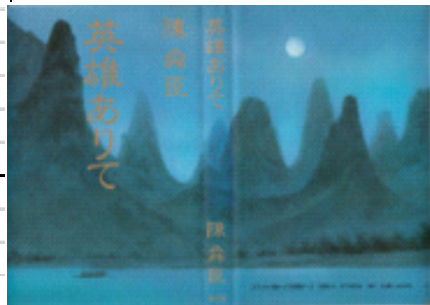
す。中・短編集は題名の頭に★印を付け、斜体で表示しています。題名の後の＊は、同著が書き下ろしであることを表わしています。右端の「通信No.」欄は、「陳舜臣さんを語る会通信」の掲載号です。

1970	5月のアメリカ及びカナダ旅行に際し、中華民国パスポート取得 凍った波紋		80
1971	北京悠々館＊ ★異郷の檻のなか		80
			82, 5
			15
	★夜の歯車		20
	★崑崙の河		82
	★六甲山心中		108
	★なにも見えない(文庫本改題「望洋の碑」)		83
	★南十字星を埋めろ		84
1972	9月 日中国交正常化(日台断交)		
	10月 初めての中国旅行。日本赤十字社が発行する証明書による探親訪問という形で、当時、北京放送に勤務していた妹・妙玲さんを訪ねる。途上、長沙で毛沢東の生家を訪問		50
	★笑天の昇天		114
		日本の中国的 よそ者の目(エッセイ54編)	84, 75
		日本語と中国語(共著)	72
1973	8～9月 蘭州、酒泉、ウルムチ、トルファンなど、憧れの土地を初めて歩く。この旅を機に、中華人民共和国籍取得。この後、堰を切ったように中国へ。戦後、3年半の台湾暮らしから、49年10月、日本に戻った後、台湾に入国するのは41年後の1990年12月		
	長安日記-賀望東事件録(連作6編)		53
	失われた背景	中国任侠伝(8編) 風よ雲よ	49
	虹の舞台	美味方丈記(共著)	46
	柊の館(連作7話)	討論 日本人とは何か(対談集)	57
		続中国任侠伝(8編)	51
1974		史記(文庫:ものがたり史記)	63
		唐代伝奇(文庫:ものがたり唐代伝奇)	49
		青雲の軸	
	9月、3回目の中国旅行。延安にも。「その土地に立って、革命というものがないのであるか膚で知ったような気がした」		
		秘本三国志(一)	114
1975		水滸伝(文庫:ものがたり水滸伝)	61
		新西遊記	56
		秘本三国志(二)	36
	青春の烙印-神田希望館(連作6編)(原題:神田希望館)		61
1976		敦煌の旅 大佛次郎賞	63
		秘本三国志(三)	
	9月9日 毛沢東死去	■陳舜臣さんの文章を掲載した紙誌 →	50
		中国近代史ノート(選書:中国近代の群像)(12編)	61
		桃花流水	114, 116
1977	闇の金魚＊		49
		秘本三国志(四～六)	16
		旋風に告げよ(文庫:鄭成功)	87
		蘭におもう(エッセイ38編)	61
		シルクロードの旅	47
		小説十八史略(一、二巻)	94
1978		小説十八史略(三、四巻)	62
		対談中国を考える(共著)	62
	漢古印縁起(連作6編)(原題:桜獅子名品帖)		93
		北京の旅	63
	燃える水柱		126
			76

■陳舜臣さんは作家デビュー後の10余年、小説執筆といえば、「阿片戦争」以外、ほとんどが推理小説だったといえます。そのことをいいたいがために、「分類がきらい」とおっしゃる陳さんの作品を、あえて、推理小説と小説一

般に分けて表示しました。

上の表の「残糸の曲」にしても、後々、小説一般の欄に挙げている「桃花流水」「相思青花」「夢さめの坂」同様、ミステリー仕立てです。

1979	小説マルコ・ポーロ ★胡蝶の陣 熱砂とまぼろしーシルクロード列伝 夜明け前の中国-続中国近代史ノート 山河太平記 夏の海の水葬(短編連作) (原題:ゴキゲン・ハウス物語) (文庫:神戸異人館事件帖) 中国やきもの紀行 景德鎮 西域余聞	35 67 49 70 64
1980	景德鎮からの贈り物-中国工匠伝(8編)  古代人の伝言(共著) 三蔵法師の道-シルクロード紀行 弥達録-中国名言集(104編) 西域巡礼 中国の歴史(第一巻) 九点煙記-中国史十八景 中国の歴史(第二~七巻) 竹におもう(エッセイ34編) 中国歴史の旅 人物・日本史記 神戸ものがたり(「神戸というまち」加筆) 江は流れず 珊瑚の枕	49 103 23 95 23 74 10 70 69 18
1981	 中国の歴史(第八~十二巻) 小説十八史略(五巻) 太平天国 揚子江(対談) 「叛旗-小説李自成」(共訳) 翻訳文化賞 中国の歴史(第十三~十五巻) 妖のある話(22編) 英雄ありて(歴史エッセイ35編) 小説十八史略(六巻) 中国五千年	40 23 62 4 23 49 59 62 90
1982	曼陀羅の人ー空海求法伝 風騷集(著者の第一漢詩集) 録外録(エッセイ18編) 歴史の交差路にて(鼎談集) インド三国志 中国発掘物語(正・続) 中国画人伝(47編) シルクロード巡歴 長安の夢(唐の都長安を描く)	21 60 97 39 49
1983	★クリコフの思い出 ★崩れた直線  天竺への道 日本と中国-近代の幕明け(対談、共著) 澄懷集(著者の第二漢詩集) 中国の歴史 近・現代編I	86 52、89 23
1984	7月 台湾、38年にわたった戒厳令を解除 相思青花(「波の残影」を改題) 六甲山房記(エッセイ24編) 中国の歴史 近・現代編2 歴史清談・古代オリエント(共著) 中国畸人伝(8編)	44 73 23 49

【小説中・短編集】通常、各種週刊誌、月刊誌等に発表された、それぞれ生い立ちの異なる中・短篇が一冊の本にまとめられ、単行本として刊行される。短編集とはそういったもので、この年譜では、題名を緑字斜体で表わし、前に★印を付けた。

逆に、一話一話は短編であっても、それらを括る大きな題名や一つのテーマ・場所・時代設定などのもとに執筆され、同じ雑誌に連載された連作短編もの、例えば、「長安日記」「中国任侠伝」「柊の館」「景德鎮からの贈り物」「妖のある話」などは短編集とはしなかった。

1988	1月 蔣経国総統死去。副総統李登輝が総統に		西域黄河名詩紀行 シルクロード旅ノート 東眺西望(歴史エッセイ20編) 茶事遍路 読売文学賞 中国の歴史 近・現代編3 中国詩人伝(29編)	107 22 23 49
1989	6月4日、天安門事件		■陳舜臣さんの文章を掲載した紙誌 → 唐詩新選(唐詩私選) 雲外の峰(エッセイ37編) 含笑花の木(エッセイ49編)	109 99 100
1990	3月、李登輝、選挙で総統に選出される 10月、日本国籍取得。12月、41年ぶりに台湾へ。李登輝総統訪問。以後、憑かれたように台湾へ		戦国海商伝(「天外の花」を改題) ★異人館周辺 ★五台山清凉寺 ★杭州菊花園 楠木正成 湊川の戦い(伝記、5編)	17 17 42 66 67 66 70
1991	★海の微笑 ★三本松伝説		諸葛孔明 吉川英治文学賞 夢ざめの坂 中国傑物伝 走れ蝸牛(エッセイ70編)	26 86 45 23 71 2 101
1992	★神獣の爪		儒教三千年 元号の還暦 三燈随筆(一)(60編) 世界の都市の物語4 イスタンブール 琉球の風 仙菜と鯨 三燈随筆(二)(60編) 麒麟の志(70歳代の詩作・詩話)	37 92 89、43、52 25 7 92
1993				
1994	8月10日、宝塚歌劇80周年記念行事の講演中に舞台で倒れ(脳内出血)入院		聊斎志異考-中国の妖怪談義 耶律楚材 紙の道 雨過天青(エッセイ82編)	55 6 34 98
1995	1月13日、5ヶ月の闘病をおえ退院。4日後の17日、阪神淡路大震災		随縁護花(詩人伝、エッセイなど15編) 秦の始皇帝 三国志と中国(対話集) 談論中国名将の条件(共著) 世界の都市の物語16・香港	105 24 32 69 27
1996			チンギス・ハーン一族 神戸ものがたり(平凡社ライブラリー版) 曹操-魏の曹一族 万邦の賓客-中国歴史紀行(26編) 突破口の三国志(対談、共著)	
1997			山河在り(上、中)(下は2000年刊行)	11
1998			天球は翔ける	38
1999			エッセイで綴る中国の歴史 上海雑談(歴史エッセイ25編) 風を観る-中国史随想(13編) 曼陀羅の山(エッセイ70篇)	
2000			桃源郷	106 91 12
2001			沖縄の歴史と旅	79 60
2002	★わが集外集(文庫:獅子は死なず)		うち推理8編 神戸わがふるさと(エッセイ17編、小説9編) 史林有声-中国歴史随想(47編) 道半ば(自叙伝)	69 104 1
2003			青山一髪(文庫:孫文)	8

2004			ルバイヤート(翻訳) 中国美人伝(7篇)	49
2005			歴史に未来を観る(対談、共著) 龍鳳のくにー中国王朝興亡の源流をたどる(43編)	9
2006			曹操残夢・魏の曹一族	31
2007			六甲随筆(108編) 巷談中国近代英傑列伝(15編)	102
2007			論語抄	9
2008	二度目の脳内出血			37
2010			天空の詩人 李白 わが心の自叙伝(28回未完)	33
2011	5月、奥様(未知様)逝去。1990年、日本国籍取得時、蔡錦墩から陳未知に変更		(2017年版「神戸ものがたり」に収録)	17
2015	1月21日、市内の病院で逝去			
典拠・参考資料:集英社『陳舜臣中国ライブラリー30』年譜ほか				

右の画像は私のホームページ『中国の友人たち』のトップ画面です。

左端に陳舜臣さんの画像が表示されています。これをクリックすると、「『陳舜臣さんを語る会通信』バックナンバー一覧」(No. と簡単な内容)が表示されます。No. をクリックすると紙面が現われます。

例えばNo.43だと下のような紙面が表示されます。



中国の友人たち

自己紹介
Mail
0023635

内部リンク
陳舜臣さんを語る会
(下の画像をクリック)

台湾紀行
(下の画像をクリック)

外部リンク
呉錦堂を語る会
(下の画像をクリック)

もくじ (下のタイトルが画像をクリックしてください)

第一部 連雲港で日本語教師をして 第二部 江蘇省の歴史を歩く 第三部 中国感動の旅

2005.8~2008.10
○連雲港ってどんなところ
○授業でついつい聞西井が
○学生は一に勉強 二に勉強
○連雲港・淮安講演旅行

2005.8~2007.4
○大運河の真珠、淮安
○瓊羽、新邦抗争の地、徐州
○春秋呉の都、蘇州
ほか

○客家の里を訪ねて
○承德(避暑山荘)への旅
○紹興みてある記
○苗族の里を訪ねて
○井岡山・瑞金への旅
○太平天国の故地を訪ねて
○毛沢東の故居を訪ねて

第四部 中国歴代皇帝陵 第五部 呉錦堂ー神戸と中国ー 第六部 中国の友人たち

写真とエピソードで語る中国歴代皇帝陵
○秦始皇陵及び兵马俑博物館
○漢武帝陵及び唐楊貴妃墓
○清東陵及び西陵
天津市内観光
保定市内観光

神戸で活躍した華僑 呉錦堂
現在の孫文記念館は呉氏の別荘
○呉錦堂の故郷 寧波への旅
○神出、小栗野村のお祭り

○卒業のとき(2007年6月)
○江南水郷古鎮めぐり
○新天地と足浴按摩(上海)
○泰康路210弄 田子坊
○W. R.の日本旅行
ったよ
○L. Y.の初めての日本

ついでながら、ホームページ、
第三部 中国感動の旅 では、

- ・「客家の里を訪ねて」
- ・「承德(避暑山荘)への旅」
- ・「紹興みてある記」
- ・「苗族の里を訪ねて」
- ・「井岡山・瑞金への旅」

・「太平天国の故地を訪ねて」
・「毛沢東の故居を訪ねて」
などを掲載しています。

今年(2024)は陳舜臣生誕と「大アジア主義」講演の100周年

《1. 安井三吉著『孫文 華僑 神戸』に描かれた「大アジア主義」講演》

革命家と作家夢見た「大同」

孫文 華僑 神戸

2024年10月5日 神戸新聞朝刊

安井三吉著



ひょうぶ
選書

2024年の神戸で、神戸と中国、日本と中国の関わりについて過去を振り返り、未来を考える一冊だ。中国の革命家・孫文(1866~1925年)と、神戸出身の直木賞作家・陳舜臣(1924~2015年)に焦点を当て、アジアや世界を見る。

今年、神戸は二つの節目を迎えた。一つは、孫文の「大アジア主義」講演から100年。孫文は1924(大正13)年11月28日、兵庫県立神戸高等女学校(現神戸高校)の講堂で、歴史に残る講演をする。「東洋の王道」と「西洋の覇道」を分け、同じ価値観を持つ東洋の団結を説いた。二つ目は、陳舜臣の生誕から100年。陳は孫文に自らの理想を重ね、作品を通してその思いを発信した。

本書は序章で1895(明治28)

年、孫文が中国・清で蜂起に失敗し、亡命を試みて神戸にたどり着いた運命的な経緯を物語風に回想する。第1章は神戸華僑社会の成り立ちや、神戸華僑たちが孫文の活動や蜂起にどう反応したかを整理。神戸の実業家である三上豊夷らが孫文を支援し、神戸華僑と連帯して孫文を迎え入れた史実も描き出した。

「神戸は止むを得ない。新しい神戸は、一部の人が夢見た神戸ではないかもしれない。しかし、もったかがやかしきまちであるはずだ。人間らしい、あたたかみのあるまち。自然が溢れ、ゆつくり流れおる美わしの神戸よ。そんな神戸を、私たちは胸に抱きしめる」(陳舜臣「神戸よ」より)

第3章では陳舜臣を論じる。陳は台湾出身の両親のもと神戸で生まれ育った。幼いころからアイデンティティの揺らぎを感じ、台湾の民主化や中国・天安門事件などに影響を受けながら自身の孫文像を変化させていく。その変遷を作品や対談などからひもといた。

陳は阪神・淡路大震災直後、神戸新聞に「神戸よ」を寄せた。筆者はそれを引用し、問うている。震災から30年を迎える神戸。ここは「あたたかみのある美しい町」であるのか。

「東洋の王道」か「西洋の覇道」か。民族主義か、世界市民主義か。著者は2人が国籍や民族の概念がない社会「大同」を夢見たと指摘する。では、孫文の講演から1世紀を経て、差別や争いが絶えない今を2人ならどのように論

評者 安藤真子・文化部(神戸大学出版会・2310円)

やすい・さん 1941年東京生まれ。東京大学大学院博士課程満期退学。神戸大名教授。専門は中国近現代史。孫文記念館、神戸華僑歴史博物館名誉館長。

ポケット ボックス

▽陳舜臣著「桃源亭へようこそ 中国料理店主・陶展文の事件簿」神戸で中華料理店「桃源亭」を経営する華僑・陶展文。筆法の達人であり、漢方医でも

ある。その周囲で事件が…。米国贸易会社の神戸支店長がパティリーのさなか絞殺される「くたびれた縄」など陶展文シリーズ全6編ほか、料理ミステリー「幻の百花双瞳」を収録。古き良き本格ミステリーを堪能できる。生誕100年記念の傑作集。(徳間文庫・990円)

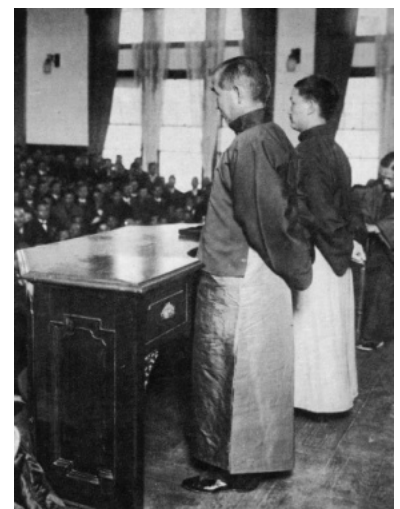
《2. 『山河在り』に描かれた「大アジア主義」講演》

『山河在り』では、関東大震災(1923年)から日中十五年戦争前夜までが描かれています。以下の記述並びに表紙画像は講談社文庫版(2002)によります。

孫文の最後の来日、及び「大アジア主義」講演(1924年11月28日)は、中巻「秋の送別」の章を中心に記述されています。一箇所、抜粋転載します。

(講演後の)ロビーには新聞記者がたむろしていた…。「大きな不満がある!」訛の強い日本語に、中国人記者かとおもって声のほうをみたが、そうではなかった。朝鮮京城の「東亜日報」から派遣された記者であった。その名を尹洪烈という。「どんな不満かね?」…日本人記者が訊いた。「西欧の覇道をきわめた日本をほめすぎている。…。日本の栄光の陰に、朝鮮があった。いや、げんにあるのだ! ひとことでもよい。朝鮮にふれてほしかった。…。「孫文が朝鮮について無知だと言いたいのかね?」「いや、無知であるはずがない。知っているながらふれなかったのが私の不満なのだ」

(中巻 p. 191-192)



神戸高等女学校で講演する孫文
陳徳仁著『辛亥革命と孫文』より